

[15] Crossover

<https://doi.org/10.15017/19351>

出版情報 : Crossover. 15, pp.1-33, 2003-06. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン :
権利関係 :



新米教員着任雑感

伊藤 泰信
(国際社会文化専攻)

私は4年間在籍した比較社会文化研究科(比文)博士課程を単位取得退学後、日本学術振興会特別研究員(PD)として2年間(そのまま比文で)研究を進め、今年の4月から大分県立芸術文化短期大学国際文化学科の専任講師として着任しました。着任から1ヶ月半が過ぎただけの時点でこの文章を書いております。着任して間もないこの時期ですから、何かまとまったことを書くというところまでは到っていませんが、ひとまず筆を執らせていただきます。

【勤務先について】

大分県立芸術文化短期大学(「芸短大」と略)は学生数が800人弱の、非常にこぢんまりした大学です。音楽科・芸術科というやや歴史のある学科(全国で初の芸術系短大として誕生)と並んで、11年前に設置された国際文化学科の文化人類学担当教員として雇われました。国際文化学科のほかに歴史の新しい学科としては、情報コミュニケーション学科があり、それぞれ一学年110人ほどの学生がいます。音楽科があるため、どこからともなく声楽の練習の歌が聞こえてきます。

4月1日の辞令交付式では、辞令の交付とともに、宣誓文を読み上げさせられ、署名・捺印させられました。宣誓文には日本国憲法精神の遵守と地方自治の本旨を理解して全体の奉仕者として公務の執行に努めるべきことなどが書かれています。また、大分県職員証・バッジも与えられ、地方公務員になったことを改めて思わされました。

大学院であれば、いろんな「回り道」をして大学に戻った院生などいましたが、ここではほとんどの学生が18歳から20歳、留学生も一学年2、3人程度です。ただし、短大の2年生は社会に出る直前であるという意味において、4年制大学の4年生などと成熟度において同じだ(下手すると、いつ修了するか分からないモラトリアム状態にありがちな院生よりもよっぽど社会に出るための心構えができつつあるということでしょうか)という話もあります。卒業後、実社会に出ることが決まっている中学生が妙に大人びているというのと同じような話ですが、時に芸短大の学生と話をしていてそのように思うこともあります。

【教育について】

授業は、「文化人類学」「民俗学」「比較文化論」「異文化コミュニケーション」「文化人類学(卒業研究)ゼミ」などを担当しています。これまで私大で非常勤講師として担当した経験のある文化人類学概論以外は手探りの状態です。

前述の辞令には「大学教育職〇級に決定する」などと明記されています。私は、学生の教育のために、教育職として雇われたわけですから。そして、授業を担当するにあたって、そういえば、大学(短大)で教えるということについてこれまできちんと学んだことがない、ということに気付かされます。ひたすら自分が知るために学んできたというのが学部・大学院時代でした。「知っていること」と「教えること」とはイコールで結べるようなものではありません。そこで自分が受けた講義やゼミ風景などを思い出しながら、授業のやり方を模索するということになります。その際、あの時(大学院の)あの先生はこういうしゃべり方をしていたなあという、ある種のスタイルを思い起こしながら頭の中で反芻し、いつの間にかそうした先生の口調をどこことなく真似ている自分に気付いたりします。(将来、人類学の研究者になるわけでない学生に対して)時に大事なものは、教授内容もさることながら、教授スタイル(口調や話のテンポ、記憶に残る冗長性を含んだフレーズ)だったりするからで、それは、将来、



文化人類学(卒業研究)ゼミの学生たちと。筆者の研究室にて。

学生が実社会で物事を考える時に人類学で学んだフレーズが頭の片隅に入っていてくれればという気持ちが働くからです。

私の担当する文化人類学卒業研究ゼミをとった学生に「どうしてこのゼミを選んだのか？」と聞いてみると、「1年次に履修した（前任者の）文化人類学の授業が面白かったから」という学生が何人かいました。責任を感じる瞬間です。

教えることについてもう一つ言えば、大学院で学んだことを短大向けに変換する必要があることです。所属学科のPR誌にゼミ紹介の文章を、以下のように書きました。「人類学者は主に第三世界の小さな村などに長期にわたって住み込み、異なる文化についての調査を行います。人類学を研究していると言うと『ウルルン滞在記』というテレビ番組が好きで、私も村などに行きたいのですが」という反応があります。芸能人が、物質的には日本人よりも貧しいが心は豊かな現地住民と「心の交流」を行うという人気番組を見ることは、異文化を知るためのきっかけとしては価値あるものでしょう。しかしそこでは様々な背景が排除されています。テレビスタッフを映さないようにしているのはもちろんのこと、少数（先住）民族が現在おかれている貧困や、支配的多数住民との関係なども出てくることはありません。単に珍しい文化などを知るだけ、心の交流を行うだけが人類学ではありません。ゼミでは、異文化の人々が現実におかれている状況への想像力を養って頂きたいと思います」。人類学を別の大学で教えている友人は、『ウルルン滞在記』と聞くと、「またか!」と閉口しますが、テレビの人気番組は学生達にあなどれないほどの影響力をもっており、むしろ逆手にとって用いるようにしています。『ウルルン滞在記』と人類学的調査はどこが違うかという問いを導入部で使うといった具合にです。

【運営について】

芸短大のような公立短大の「生き残り」戦略は学科の会議（や教員の井戸端「会議」）での大きな議題になっています。特に、大分および隣県である程度存在が知られている音楽科や芸術科と違い、国際文化学科はその存在すら知られていないという事情もあり、入

学希望者をただ待っていればよいというわけにはいかず、PRの必要性がでできます。

私の所属する国際文化学科には、卒業後の編入希望者が多いという特徴があります。入学者のかなりの数ですが、実はもともと国公立の4年制大学志望で（時には希望を叶えられずに）入学してきた学生だったりします。去年は、国際文化学科109人の卒業生のうち、23人が九州・山口・四国の国公立4年制大学へ編入していきました。そのため、編入対策をきちんとやっている、というのをアピールして、学生を確保しようとする戦略がありうるわけですが、そうすると、4年制大学の「予備校」のような役割になるのか、いや、短大独自の良さを打ち出すべきではないかといった議論が論じるべきものとして立ち上がってきます。

このように教育以外にも、運営（ある種の「営業」に近いものも含めて）に尽力することが求められるわけです。これも大学院で実践したことのなかったものです。学生のアンケートや県別・高校別の受験者数などのデータを駆使した学生開拓についての議論が、4月からすでに来年度に向けて始まっています。ただ、こればかりはなかなか案を出すことができず、会議では慎み深いお地藏さんでいるより他ないという状況だったりします。

【研究その他】

大学教員がなすべき三本柱として、教育・運営の他に当然研究があります。ただ大学院と違い、この3つ目の研究は大して求められているわけではありません。が、勿論やらないわけにはいきません。参加している科研や国立民族博物館の共同研究等をこなしつつ、今年度中に完成させなければならない期限が迫っている（課程）博士論文のことで今は頭の半分が占められているという状況でしょうか。

最後に採用にまつわる事柄について。私は運良く公募にひっかかったわけですが、後から内部の話を聞くと、「そんな基準で選ばれたのか」と、自分の想定していたものとは別の判断基準が決め手になっていたりします。公募で、自分の分野に少しでもひっかかるものがあればすべて出しなさいという指導教官の助言は適切でした。皆さん、公募、出しまくりましょう。

歴史家として生きること

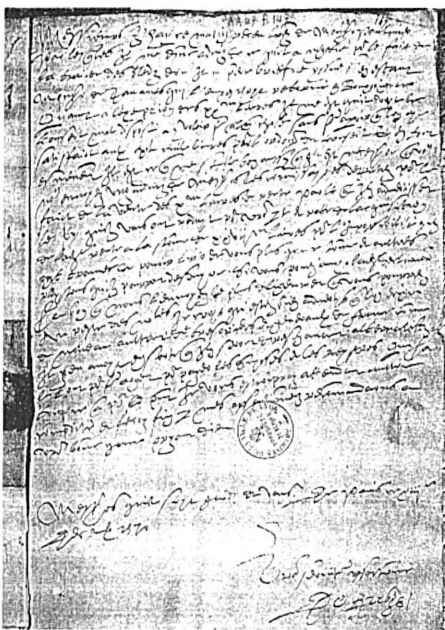
小山 啓子
(国際社会文化専攻)

2003年3月26日は私の学位論文「16世紀フランスにおける王権と都市社会——都市リヨンを中心として——」の公聴会が開催された日である。質疑に対し充分に応えられない点もあったのは私の落ち度であり課題であるが、審査員の先生方からは大小様々な問題点の貴重な御指摘や異なる視座からの読みを御教示いただき、20名ほど立ち会ってくださった参加者の暖かい眼差しのもとで、人生で忘れることのできない有意義な時を過ごした。最初にこの場を借りてあつく御礼申し上げたい。

「16世紀をやっています、なんて平気な顔して言うやつはばかだ」。東京での研究会の懇親会で、ある先生から面と向かってこう言われたのは、もう7年くらい前のことだろうか。その頃私は修士論文を終えたばかりで、いよいよ本格的な専門研究——要するに手稿文書分析——に取り掛かろうとしていた。私はその言葉の意味するところを理解してはいた。つまり、日本においてはもちろんフランスにおいてさえ16世紀フランス史研究者が少ないのは、ひとえに史料操作上の難しさに尽きる。16世紀という時代は、わずかな印刷史

料の背後に膨大な手稿文書が残され始めた時期であるが、その筆致は中世後期のゴシック体に近世初期特有の草書体が混ざり、さらに羊皮紙から紙への移行直後にあって劣悪な紙質が文字をますます判読し難くしているという物理的問題が重なる。一度は16世紀の研究に手を染めた歴史家が、のちに17・18世紀へと時代を下っていってしまう理由も、ひとつはそこにある。大家でさえ敬遠するこの時代を研究しようとする、しかもその難しさを知らずしてそれを人前で平然と言うなんて、全くもって無知である、というのが冒頭の言葉の意味なのである。それでも、いやそれ故にこそ、私のraison d'êtreがあるのだと、私はひとり決意を固めていた。

2000年の秋から、私はリヨン第2大学DEA（博士後期課程1年次）に留学する機会を得た。不安と希望とを胸にリヨンに到着したが、いきなり困難に直面する。早速出かけて行ったりリヨン市文書館の扉は平日にもかかわらず固く閉ざされており、そこには移転のため当分の間閉鎖する旨を記した紙が無常にも貼られていたのである。DEAでは1年で論文を出さなければならないのに、市文書館の再開は翌年3月とも5月とも言われた（この辺の曖昧さはフランスならではの。そして実際に開いたのは9月だった！）。指導教授のバイヤール先生とは出発前に私の研究テーマについて数通の手紙を交わしていたのに、このような事態は全く知らされていなかった。何とか便宜を図ってもらいたいと思い、大急ぎで先生と面会したのだが、逆に「じゃあ、どうするの？」と問いただされてしまう始末。先生はローヌ県文書館に所蔵されている公証人文書でも見たらと言うのだが、公証人文書を中心に分析するのならテーマの変更を考えなければならないし、それに16世紀のそれも前半の公証人文書は非常に取り扱いの難しい史料である。結局、私は市文書館の館長マダム・マランに直談判しに行き、彼女の御厚意のおかげで、必要とする市参事会審議録のマイクロフィルム50年分を県文書館に運び出してもらい、そこで作業をすることが可能となったのである（このことは後々までもバイヤール先生を驚かせることになった）。おそら



特使Claude de Rubysがリヨン市参事会に宛てた書簡（1570年）



ローヌ県文書館

く、極東の地からはるばるやって来たまだ言葉もままたらぬ留学生に憐みを感じてくれたのであろう。しかし安心したのも束の間で、本当の苦心はそれからであった。私は毎朝、ドミニコ会系修道院を改装した美しい県文書館があるフルヴィエールの丘をいそいそと登って行ったのであるが、帰りは決まって「日暮れて道遠し」とばかりに足取り重くとほとほと下ることとなった。というのも、1日中文書館にいてもほとんど進まなかったからである。パレオグラフィー（古文書学）の授業にも出ていたが、そこでの文書は常に17・18世紀のものであった。あるとき私はパレオグラフィーの先生のところに行って、1葉だけでいいから16世紀の市参事会関係文書を読んで欲しい、そしてそれを参考にして応用することができるからと懇願してみたが、16世紀の文書は難しいし時間がかかるものだ、それに私は忙しい、と全く相手にされなかった。当然バイヤール先生にも相談したが、17世紀の財政史の専門家である先生は16世紀の史料は17世紀のものとは異なるから私には読めない、ときっぱりとした態度を崩さないし、さらに追い打ちをかけるように、一次史料から新しい問題を見つけないとDEAを取ることはできませんよ、とおっしゃる。やっぱり16世紀をやろうとした私が甘かったか…解決の糸口の見えない史料を前にして、外国人である自分がいったい何のために何を研究しようとしているのか自問する日々が続いた。私の苦悩は、暗くて長いヨーロッパ特有の冬とともに始まり、深まっていく一方だった。

転機は出会いとともに訪れた。16世紀後半のリヨンの社会経済史に関する博士論文を執筆中の院生と知り合ったのである。デルフィヌは、私から見ればまさに神がかり的、同時代人かと思うほど文書が読めた。私はすがるような思いで何度か一緒に読んでもらい、それを対照表化することによって前進するきっかけをつかんだのである。その上、彼女は私のフランス語も読んで直してくれたり、家に招きあう公私共に友人と呼べる貴重な存在となり、今も続くこの交流は私の留学の非常に大きな幸運であった。10月にDEAに入ったばかりなのに、翌年1月末には授業のレポートが迫っていた。レポートは1月だけで作成しようと腹をくくり、12月いっぱいまで市参事会審議録をほとんどあてもなく読むことに費やした（この史料は市参事会が関与した都市行政のあらゆる側面、すべての名士会議と住民総会の記録、それからリヨンに関する国务会議裁決や王令などの控え、都市の有力者に関する情報も含まれている大変有益なものである）。なぜなら2月にはもうDEA論文の中間報告書を出さなければならなかったからである。その頃、わずかながらも読んだ市参事会審議録の中から、私は2、3の興味深い事実に着目しはじめていた。バイヤール先生はそのひとつ、リヨン市参事会が都市の安定維持のために活発な渉外活動を展開し、その最前線として王権に派遣した特使が人脈を生かして都市の要請を伝え、それを実現する交渉能力を確保していたこと、その特使の活動に関する報告を



リヨンの旧市街

Bon travail!と評価して下さった。これを中心にしてなんとか中間報告書を書き上げ、少しの安心感の訪れとともにリヨンに来て初めて小さな旅行に出ることを思いついたのは、復活祭の休暇が来る頃だった。

こうして2001年9月にDEAを取得すると、その後の半年間は自由に文書館に通い、好きなだけ史料渉猟を行うことができた。最初は全く歯が立たないと思えた文書でも、毎日触れて慣れてくると完全にではなくても読めるようになっていった。くせはあってもそれなりの規則性があるものだし、想像力も逞しくなった。目を通すべき史料は次から次へと広がっていったが、以前から比較社会文化研究科に提出したいと考えていた博士論文のためには、そろそろ帰るべき時が近づいていた。リヨンでの博士課程を休学にして帰国したのは、2002年の2月末である。帰国までの数ヶ月間、日本でも史料解読が続けられるように、私は重要な史料のコピーを取る作業に移行した。紙への複写は普通なら1枚20サンチーム（約25円）である。しかし私がコピー代を払おうとすると、文書館員の方はそれを遮るか、ほとんど取るに足らない額しか受け取らなかった。「君には探していたものがあって、それがここにこれだけたくさん見つかったんだ、こんなに喜ばしいことはないじゃないか」と言いながら。私がした大量の複写に対して、支払った額はその何10分の1にもならなかった。こんなことを書いて市文書館の管理体制が問われなければよいが、私の研究にはずっと、アンドレ・メールさんはじめ心優しい市文書館員の方々がそばにいてくれた。研究の営みは孤独だけれど、その周囲にはつねに直接・間接の協力者の支援がある。

私の最初の研究対象は、近世フランスの国王儀礼であった。諸権力の行使を可能にした万人に卓越するものとしての国王の権威は、いかに獲得され、人々の心性に根付いていったのか、権力はどのように表象され、読みかえられていったのかということに関心をもっていた。したがって当初より視座は儀礼の受け手側にあったのだが、国王が各都市で行った入市式を検討しながら、私は都市と王権の関係、言い換えれば地方と中央の関係により興味を抱くようになった。というのも、儀礼に従事しなければならぬ国王、王国安寧のためもしくは拠出金を要請するために都市に赴かねばならない王権、臣下と直接対話を行うことを目的とした宮廷の移動性といった、旧来の絶対王政理解とは別の側

面が見えてきたからである。都市の方では、自律性の象徴でありその力の具現化でもあった市壁の大規模な増・改築に加え、16世紀前半には市壁内部の秩序化志向が見られ、貧民に対する施し物会の開催や施療院・学寮の設立といった世俗の手による慈善・教育事業が推し進められた。こうした公共事業の積極的な展開には必ず、大市開催権や間接税徴税権などの諸特権の王権による認可が裏書きされていた。つまり都市の発展と王権の存続は共生関係で成り立っていたのであり、国王入市式も決して王権からの一方的なプロパガンダではなく、このような共生関係を表したものであったことを確信するに至ったのである。そして都市社会の内部分裂が、王権の市政介入を誘引する要因となっていた。こうして学位論文では、都市と王権の間の動態的関係をめぐって、王国第二の都市リヨンを主たる対象として取り上げ、地方と中央の相互交渉のあり方を、連動する都市内部の社会構造の変容と絡めて検討したのである。

早いもので今年の5月11日は、私の最初の指導教授である志垣嘉夫先生の7回忌でした。私はご存命中に何も成果をお見せすることのできなかった不肖の弟子ですが、先日ブルゴーニュの赤ワインを持って川尻のお墓に参り、いくらか罪滅ぼしをした気になりました。志垣先生亡き後、何も言わず即座に指導を引き受けてくださった高田和夫先生に、私は心から御礼申し上げます。もし高田先生の御支援がなかったならば、私は今この地点に立ってはいなかったでしょう。それから、留学前に10年は戻るなど叱咤激励していただいたのに1年半で帰ってきた私を破門しないで下さった清水展先生と、研究やフランスに関するカピリアでの談話、いつも変わらぬ温かさで、けれども常に考えさせられる鋭い御意見を述べて下さった阿尾安泰先生に深く感謝しています。また、目に見える形でなくても間接的に支援の目をむけて下さった先生方の助けのもとで、私は育ててもらいました。間違いを犯したり、必ずしも良い成果を出すことができなかった時でも、その度に許してもらいながらここまで来ました。研究内容ではまだたくさんの課題を背負っていますが、今ようやくにして研究者としての出発点に立ったところであり、これからはお世話になった方々への感謝の気持ちを、真摯な研究をすることで示していきたい、そう思っています。

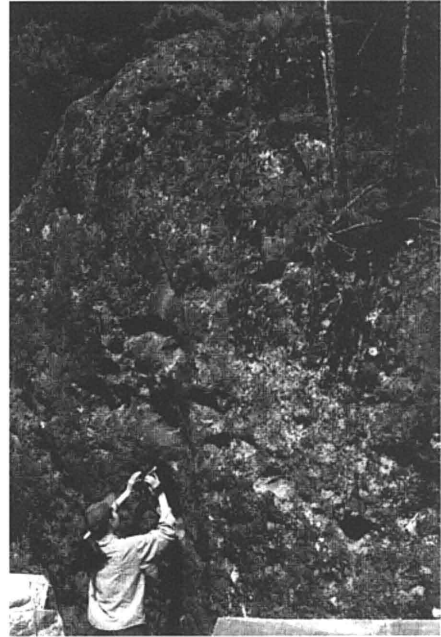
どうにかやってきた7年間

杉 本 美 華
(国際社会文化専攻)

九州大学大学院比較社会文化研究科(現在は同学府)に7年間も通った私。初めは研究生としてドキドキしながら学んだ1年間、なんとか修士課程に入学できて気合いを入れて研究に励んだ2年間、いつの間にか博士課程に進学し本当にこれでいいのだろうかと自問自答の続いた4年間。この3ステップがあったからこそ、今の私があるのだろう。

私立大の農学部応用昆虫学研究室出身の私が、この研究科の研究生として入学した頃は、「場違いなところに来てしまった」という自己嫌悪を感じながら日々を過ごした。私の入った研究室は、生物好き(特に虫好き)でヤル気満々な先輩方が主に昆虫分類学を楽しそうに研究しているところで、「顕微鏡で虫を観ていて楽しい」、「たくさんの虫の種類を知っている」という方々が多かった。当時の私は「顕微鏡で虫を観る?何をどういう風に観る?何が面白いんだろう。私は虫の名前なんてロクに知らない!」と、彼等の感覚が理解できず、また自分の知識の乏しさに引け目を感じていた。私大の学部では同じ「昆虫」を研究対象にしていたとはいえ、こちらの院生達の虫に対する考え方がかなり違っており「分野が違う!」と当時は一人で悩んでいた。とりあえず修士合格を目指していたので、ひたすら研究室で勉強し、入試が終わるまで「顕微鏡で虫を観る」ことをあまりしていなかった。合格が決まり、「研究室の先輩方のように」とまではいかなくても、最低限「顕微鏡で虫を観る」ことができるよう、かなりハードな昆虫形態学の勉強を始めた。私は「顕微鏡で虫が観れる」ようになると、平行して修士論文のテーマに取りかかるようになった。研究生をしていたおかげで、4月に初めてこの研究科に入学する場合よりも少し早く取りかかることができ、ちょっとお得であった。

修士課程では「虫の一生を観る」ことに気合いを入れ、やれそうな事はちょっと無理をしても頑張ってきた。研究対象は鱗翅目ミノガ科(ミノムシの仲間)に属する蛾の10種で、本州から九州にかけて各地で幼虫を採集して回り、飼育して成虫にまで育てあげ、交尾・産卵させて、1齢幼虫(赤ちゃん幼虫)が初め



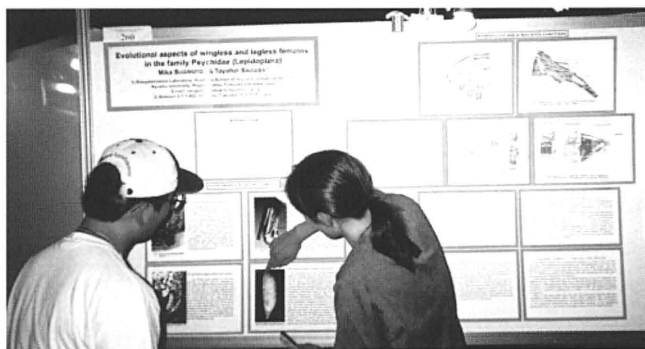
修士課程当時。炎天下の中、温泉街にある巨大な岩の表面に生息しているミノガの行動を、観光客の眼も気にせず録画している筆者。

てミノを作るまでの行動や生態を観察し、記録を取っていった。ミノガの仲間は卵から成虫になるまで1年近くかかる種がほとんどで、なるべく効率良くデータがとれるように、蛹になる前の幼虫やすでに蛹になった個体を主に採集した。しかし、種によって成虫の発生時期が春先から晩夏まで様々だったので、結局飼育は1年中途切れることなく続けなければならなかった。修士論文のデータ収集の為の飼育だったが、最も多数の個体を飼育していた時は朝から夕方までミノガ達の世話にあけくれてしまった。飼育だけで1日が過ぎていくと「今日の仕事は何をしたんだろう」と。飼育に対する嫌気が徐々に増していきながらもデータ収集は緻密にやっていたので、データをまとめて、どうにか修士論文を完成することができた。私の修士論文はミノガの行動や生態の記載で、当初は英文の予定だったが、私の乏しい英語力では完成までにあと1年にかかるということで、日本語でまとめさせていただいた。しかし、昆虫の複雑な行動を記載することは日本語ですら本当に難しく、「この動き方はなんて表現したらいいんだろう。修論に参考資料でビデオをつけ

「やいけませんか?」と指導教官に無謀な質問をしたり、四苦八苦しながら修士論文を書き上げた。毎日飼育と記録に追われ、飼育放棄したくなることもあったが、このようにして修士論文を書き上げ、ミノガの一生をまとめてみて「とりあえずこの種類については、私は知ってるって言えるかも」と思えるようになった。たった数種だが、これらの虫の「形(=形態)」と「一生(=生態・行動)」をしっかり観ることができ、自分でも「知っている」と言える対象ができたのは本当に嬉しく、ちょっとした達成感を感じながら修士課程を終えた。

研究生の頃は修士課程のことだけしか考えておらず、博士課程は「研究熱心の人が研究者になるために進む道」のイメージがあった。しかし私は「目標!研究者」と思っていないまま博士課程に進学した。やり始めたからには続けていかなければいけないという気持ちを持ちつつも、最初にあまり気合いが入っていなかった事が後に様々な失敗と反省をもたらした。

博士課程では「ミノガの進化を考える」ために、修士課程で習得した「形と一生を観る」方法で、さらに多くの種類を、さらに詳しく観ていった。修士課程の時より気合いが少し低調気味のまま研究に取り組んできたが、博士課程2年の夏に自分の立場と認識の甘さを自覚させられた。私は初めての国際昆虫学会議に参加して、ポスターセッションで発表するためブラジルに先生方と旅立った。国際学会なだけに会話は全て英語。自分の発表もちろん英語で行い、質問も英語である。先生から国際学会への参加を勧められ、ずいぶん迷ったあげく、せっかく高い旅費をはたいて日本の裏側であるブラジルまで行って、せっかく世界の学界の大御所達と話ができる機会があったのに、私の語学力の低さと知識不足のため、得るものがあまりにも少なく、残念であった。



博士課程当時。自分のポスターセッションを乏しい英語力を振り絞って懸命に説明?している筆者(右)。

博士課程は学生であっても「研究者の初期段階」であり、国際学会に参加した事でその自覚を強いられると同時に、自分の研究に対する気合いのなさが不安となった。もともと「もっと何かを知りたい」から大学院にきたのであり、研究者になりたいとは夢にも思っていなかったし、実際になれるわけがないと思っていた。しかし博士課程で研究を進めていくことは、多少なりとも「自分が研究している」という自覚と、研究に対してある程度自信を持っていないといけなかった。しかし、私には自分のやっていることに対して自信がなく、「本当にこれでいいのかな」といつも心配していた。いくら良い指導をしてくださる先生方がいても、私に自信がなければ研究もあまりスムーズに進むわけがなく、指導して下さっている先生方にもかなり失礼なことである。「自信がない=気合いがない」ということにつながるかどうか分らないが、どうしても研究に対する気合いのなさが不安となり、本当にこのまま先に進んで良いのだろうかと自問自答する日々が続いた。研究もスローペースとなってしまい、結果的には4年目にして博士論文をまとめることになった。論文作成の時期に突入してしまうと、逆に自信がなくてもとりあえず書いてしまわなければ、という変な開き直りで一気に突っ走っていった。指導して下さった先生には大変失礼だと思うが、仕上がった論文を「これでいいの?!」という不安を持ったまま、提出締切ギリギリでとにかく博士論文を提出することができた。ドミノのように次から次へと大慌てで事が進み、公開審査もどうにか終わり、学位を取得することができた。

学位を取得した今も研究に対する十分な自信があるわけではないが、現在は日本学術振興会の研究員として主に熱帯圏のミノガの研究を続けている。別にミノガが嫌いになったわけではないし、「もっと何かを知りたい」という気持ちはまだまだある。研究生で「形を観る」ことができるようになり、修士課程で「一生を観る」ことができるようになった。でも「観る」だけではなく、「観た」ことをどうやって自分の中に吸収し、体系立てて人に説明することができるようになるか、という肝心なことがうまくできていない気がしてならない。学位を取得しているという自覚や、研究員の立場であるという自覚を持ち、自分の研究に対して、どんな人から何を言われても胸をはって話せるように、もっともっと自信を持てるようになるには、まだ時間がかかりそうである。

旅の凝視—留学への道

林 姿 君

(日本社会文化専攻)



「この街で、自分を再生させることができるだろうか。自分の中にルネッサンスを興すことができるだろうか。」——『冷静と情熱のあいだ』より

人生は一連の旅であり、路上で進んだり止まったりし、模索しながら進んでいく。

幼い頃から私はずっとどこか完全に違うところへ行きたいという意思が強かった。だれも私のことを知らないところへ。自分を未知の世界に置いて、なにか面白い発見や可能性が出てくると信じているのだ。大学卒業間近な頃、今までの生活から抜け出したいという思いが溢れてきた。かといって今までの生活が無色無味だったわけではなく、ただ別の空間に飛び込みたいという気持ちで私の中はいっぱいになり、そして留学への道を決めた。

もちろん最初はそんなに順調なことばかりではなかった。大学の申請や奨学金の試験など、さまざまな準備をしなくてはならないし、申請の結果などもいつも心の中で引っ掛かっていた。不安いっぱいでも落ち着かない日々を送り続けた。ときには、やめようという考えも思い浮かんできたけれど、自分はその境界線を乗り越えないと違う風景が見えない、と自分に絶えず言い聞かせていた。

ようやく日本へ留学することが決定した。

日本に着いた。ひとつ違う土地に着いたとたん、私は自由の息を匂った。これから新しい生活の始まりと同時に、異郷での生活の戦いも目の前で展開していく。まずは、部屋探しに本当に苦労した。毎日朝晩町中の不動産屋を回り続け、1軒1軒の部屋を見回した。東京の家賃は驚くほど高い。1ヶ月の仲介料と2ヶ月ずつの敷金と礼金は学生の私にとっては莫大な金額だ。日本の礼金を払うというシステムはどうもおかしい。

昔のように、親戚や知り合いの家に下宿することではなく、いまの時代でただ借り側と貸し側との契約行為だけでなぜ借り側のほうから‘お礼’というお金を払わなければならないのだ。それはとても不思議に思う。とりあえず住むことは一段落がついた。学校の生活もひとつの戦い。先生や研究室の友達とどうやって付き合っていくか、授業でみんな言葉遣いやしゃべりの早さやイントネーションなどもそれぞれ違うので、かなり大変だった。自分の生活のテンポがどうしてもうまくつかめず、結局ろくな勉強もできなかったし、思いっきり遊ぶこともできなかった。さまざまな壁が立ちただけ、さまざまな困難とぶつかり合う。ときには自己嫌悪に陥ったこともある。しかしそれこそが、刺激となり、どんどんインスピレーションが湧いてくる。もし、旅は1つの豊富な探検であれば、そのなかにただ楽しい、美しいことが入っているだけではなく、苦しい、悲しい部分も含まれているべきだ。あらゆる体験でその旅が成り立つのだ。

留学ということで異なる文化と接触でき、異なる言葉を使い、異なる思考も出てくる。特に人々との触れ合いはいつも思いもよらない、面白い考えを生み出す。混合的、交合的、そして、美学的。

「夢のない人生なんて味なくなったチューインガムみたいなもんだもんね!」「いつもふたりで’のドラマの中で主人公のみずほはそう言っていた。確かに、留学することは「夢」を与えてくれた。現実のように、夢のように。夢は現実の対極ではなく、その一部として存在している。

「ここに来てよかった!」、といつも自分のなかで叫んでいる。この旅路は一番の重荷なのかもしれないが、それと同時に1つの充実した生活の象徴でもある。



平成14年度 「学会報告」 支援事業一覧

支援総件数 40件

支給総額 1,510,725円

番号	申請者				学会に関する事項			
	学年	専攻	名前	世話人教官	学会の名称	発表題目	開催期間	開催地
1	博士1	日本	原 正三	小 池 裕 子	国際人類学民族学会 議2002(IUAES 2002)	AMS14C Dating and the Early Jomon Chronology in Japan	14/9/22～ 14/9/27	東京都
2	博士3	日本	成 田 一 江	有 馬 学	経営史学会第38回全 国大会	郡是製糸株式会社の朝鮮工場経営	14/9/21～ 14/9/22	東京都
3	博士2	日本	クレシマムト 座熟西馬木提	小 池 裕 子	国際人類学民族学会 議2002(IUAES 2002)	JC Virus Polymorphism for the Uighur Peopole in China	14/9/22～ 14/9/27	東京都
4	博士1	日本	ノミヤマ リ 野見山 里 恵	外 川 健 一	環境経済・政策学会	レスポンシブル・ケア活動の理念と現 実(2)ー地域対話を事例としてー	14/9/28～ 14/9/29	札幌市
5	博士2	日本	金 宥 暎	因 京 子	日本語教育学会秋季 大会	論理関係意識化授業の効果	14/10/12～ 14/10/13	高知市
6	博士1	日本	岡 崎 健 治	中 橋 孝 博	国際人類学民族学会 議2002(IUAES 2002)	A Morphological Study of Infant and Juvenile Skeletons from Yayoi,Medievaland Modern Period Northern Kyushu and Yamaguchi Region	14/9/22～ 14/9/27	東京都
7	修士1	日本	梅 崎 和 裕	小 池 裕 子	日本哺乳類学会2002 年度大会	カズハゴンドウのアイソトープ分析	14/10/3～ 14/10/6	富山市
8	博士2	日本	西 田 伸	小 池 裕 子	日本哺乳類学会2002 年度大会	MHC多型解析 ー北西太平洋ミンククジラを例としてー	14/10/3～ 14/10/6	富山市
9	修士1	国際	ヒン タ カ ナ 加 菜	石 田 清 隆	日本鉱物学会	合成 (Mg,Ni,Co) ーバークス閃石の赤 外OH伸縮振動バンド	14/10/1～ 14/10/4	豊中市
10	博士3	日本	ムラ カミ リ 村 上 理 映	外 川 健 一	環境経済・政策学会	韓国における廃棄物政策 ーその有効 性と拡大生産者責任	14/9/28～ 14/9/29	札幌市
11	修士1	国際	ナカ ノ 美 香	井 上 奈良彦	日本コミュニケーション学会 九州支部第9回大会	アジア諸国のParliamentary Debate活動 の実態調査	14/10/13	大分市
12	博士3	国際	カワ カミ コウ 川 上 耕 平	菅 英 輝	アメリカ史研究会	冷戦初期におけるアメリカの民間防衛	14/9/21～ 14/9/22	武蔵野市
13	博士3	国際	チウ 張 シン 張 春 田	高 洪	日本昆虫学会	東アジア及び東洋区産Dinera属の分類 学的研究	14/9/27～ 14/9/29	富山市
14	博士2	日本	ノ 羅 済 立	板 橋 義 三	国語学会 (2002年度 秋季大会)	客家語、浙江呉語からみた諷の鎌倉宋 音の音韻的現象	14/11/9～ 14/11/10	徳島市
15	博士3	国際	マキ ママ マコト 秋 山 淳	岩 佐 昌 晴	日本中国語学会	中国語の結果を表す動補構造について ーS+V1V2/A(+O)タイプを中心に	14/10/26～ 14/10/27	金沢市
16	博士1	国際	サカ タ カ シ 坂 田 完 治	岩 佐 昌 晴	日本現代中国学会 第52回全国学術大会	中国における「有事」ー戒厳法が想定 するもの	14/10/19～ 14/10/20	新潟市
17	博士2	日本	モリ 許 建 許 建 明	進 野 勇	日本地熱学会平成14 年度大会	指宿辻之岳地域N10-TD-1、 N11-TD-2、 N11-TD-3の鉱物分析	14/11/20～ 14/11/22	東京都
18	博士3	国際	モリ 杉 本 美 華	矢 田 脩	日本昆虫学会第62回 大会	台湾及び八重山群島で発見された原始的 なミノガ科の2新属について (鱗翅目)	14/9/27～ 14/9/29	富山市
19	博士3	日本	ハシ 趙 正 民	花 田 俊 典	大韓日語日文学会	戦後日本の「国民文学論」と金達壽「玄 界灘」	14/11/9	釜山市
20	修士2	国際	ハシ 藤 原 樹	高 洪	日本昆虫学会第62回 大会	陸生カメムシ類に寄生する日本産ヒラタドリバエ亜 科 (双翅目:ヤドリバエ科) の雌雄と頭部骨格の形態	14/9/27～ 14/9/29	富山市
21	博士2	国際	ハシ 田 戸 恭 子	荒 谷 邦 雄	日本動物行動学会第 21回大会	ツノクロツヤムシの育児行動ー給餌と 親子間コミュニケーション	14/11/2～ 14/11/4	東京都
22	博士3	国際	オキド ヒロ フミ 大城 博 文	高 洪	日本昆虫学会第62回 大会	東南アジア産カドフシアリ属の生物地 理 (膜翅目,アリ科)	14/9/27～ 14/9/29	富山市
23	博士1	国際	イカガ サエ コ 阿 形 佐 恵 子	松 原 孝 俊	第53回朝鮮学会	朝鮮半島における英国聖書公会聖書販売人「読書人」 に関する基礎的研究ー1883年から1915年を中心にー	14/10/5～ 14/10/6	天理市
24	修士2	日本	カサ 礎 崎 薫	服 部 英 雄	第11回日本地理情報シ ステム学会学術研究発表大会	グループによるフィールドワーク支 援用WebGISの評価	14/10/22～ 14/10/24	東京都
25	博士2	日本	シウ 周 セイ 静	三 隅 一 百	第104回日本社会分 析学会	中国日系企業の経営方式における問題 点	14/12/21～ 14/12/22	別府市
26	博士3	国際	イキ キ リョウ コ 木 良 子	高 洪	日本昆虫学会第62回 大会	ムラタヒゲナガハリバエ (ヤドリバエ科) の産卵行動ー野外データからの考察ー	14/9/27～ 14/9/29	富山市
27	博士3	日本	ハシ 藤 田 理 子	有 馬 学	2002年度広島史学研 究会大会	戦時「国民体力」管理と「健民修録」 構想	14/11/9～ 14/11/10	東広島市
28	博士1	国際	カサ 範 マサ キ 範 雅 貴	菅 英 輝	東アジア学会第12回大会	アジア太平洋におけるジョン・F・ケネディ政権の秩序形成のあり 方 ジョージ・W・ブッシュ経済担当閣僚の構想を中心にー	14/11/23～ 14/11/24	北九州市
29	博士2	日本	ツカ 本 レイ シ 塚 本 礼 仁	宮 川 泰 夫	2002年度人文地理学 会大会	愛知県一色町における養殖ウナギ産地 の存続	14/11/16～ 14/11/17	東京都
30	博士1	国際	イシ マリ ショウ コ 市 丸 祥 子	W.ミヒエル	西日本独文学会	明治期の日独交流におけるドイツプロ テスタント宣教の役割	14/11/30～ 14/12/1	熊本市
31	博士3	国際	コウ 榮 テリ コ 榮 照 子	W.ミヒエル	西日本独文学会	日独文化協定締結過程 (1938)の謎ー ナチスドイツの人種政策の観点から	14/11/30～ 14/12/1	熊本市
32	博士1	日本	ヒシ ジマ タケ 碑 島 武	杉 山 あかし	第104回日本社会分 析学会	レイメイと身体ー女性ファッション誌 「アンアン」における身体イメージの変遷	14/12/21～ 14/12/22	別府市
33	博士2	国際	ミヤモト 宮 本 なつき	菅 英 輝	日本移民学会	婦人ホームーハワイの日本人女性救済 施設	14/12/7～ 14/12/8	京都市
34	博士2	日本	コウ 黄 イ 哲 黄 英 哲	松 村 瑞 子	平成14年度日本語教 育学会	情報要求に対する日本語母語話者の「応 答展開上」の管理技術	14/12/8	東広島市
35	博士3	日本	ヨウ 楊 ケイ ビン 楊 慶 敏	久 野 国 夫	九州経済学会第52回 大会	中国石炭産業の技術進歩について	14/12/14	熊本市
36	修士2	日本	オオ 大 島 康 弘 大 島 康 弘	矢 田 脩	日本昆虫学会第62回 大会	"Pantoplia venilia(Linnaens,1758)" (鱗翅目: タテハチョウ科) の分類学的再検討	14/9/27～ 14/9/29	富山市
37	博士1	日本	ハシ 陳 ショウ シン 陳 曉 嫻	三 隅 一 百	日本地域福祉学会	中国の高齢者福祉施設運営の多元化に ついて	15/2/1	熊本市
38	修士2	国際	ツバ 辻 ショウ コ 辻 祥 子	矢 幡 久	第114回日本林学会 大会	ケニア半乾燥地における樹木の通水コ ンダクタンスについて	15/3/27～ 15/3/30	盛岡市
39	博士2	日本	ライ シュウ フ LAI, SIEW HOON	井 上 奈良彦	第11回社会言語科学 会	シンガポールの日本語教室における異 文化コミュニケーション	15/3/8～ 15/3/9	東京都
40	修士2	日本	イ ナ ナ 奈 娟	松 村 瑞 子	第11回社会言語科学 会	日本人と韓国人の敬意表現の対照分析	15/3/8～ 15/3/9	東京都

平成14年度 修士論文題目一覧
(日本社会文化専攻)

フリガナ氏名	修士論文題目
イ ナヨン 李 奈 娟	日韓の敬意表現の対照研究－日本のテレビドラマにおける敬意表現についての日本人・韓国人の意識のズレを中心に－
イ ヘスク 李 核 淑	三島由紀夫における「転身」の問題 －『禁色』を中心に－
イ トウ サチ コ 伊 東 幸 子	集団座礁したカズハゴンドウに関するDNA解析
イ トウ マ ミ 伊 東 真 美	「オノマトペ＋する・つく」複合動詞の研究
ウエ ノ マリコ 上 野 まり子	日本語における「断り」可否の要因とその方略について
オウ ケン 王 娟	日本語の接尾辞「的」について －使用実態調査と言語意識調査から－
オオ シマ ケン ジ 大 嶋 健 司	弥生時代北部九州におけるガラス製品の性格
オオ シマ ヤス ヒロ 大 島 康 宏	A generic taxonomy of the subtribe Neptina (Lepidoptera, Nymphalidae) ミスジチョウ亜族の属に関する分類学的研究
オク シマ フミ アキ 奥 嶋 文 章	ドイツにおける脱原子力合意に至るまでの歴史的展開のプロセス －脱原子力合意(独)の政治決定をめぐる交渉過程－
カキ ザキ カオル 碓 崎 薫	歴史情報への調査・研究支援のためのWebGISに関する研究
カワ ナミ ノリ コ 川 浪 紀 子	古人骨を用いたDNA分析法
キン テイ ジツ 金 延 実	在「間島」朝鮮族の日本語教育 －1907年～1931年の「満州事変」を中心に－
サ サ キ キ ミ ヨ 佐 々 木 喜 美 代	共創のコミュニティ ～福岡市における都心コミュニティの可能性～
シ カ 司 可	佐藤春夫と中国 －「アジアの子」を中心に
ショウ イク ホウ 焦 毓 芳	日本のテレビドラマの中国における流行： －ドラマを通じて形成された日本人女性像の変化を中心に－
シン コウ 沈 浩	アヘン戦争敗北の再認識 －下関「攘夷」戦前後の日本と比べながら
ジョン ボン ホ 田 奉 昊	都市空間に染み入るセクシュアリティ －‘キャナルシティ博多’とその周辺を中心として－
スナイダー トモミ スナイダー ともみ	ジャマイカン・クレオールにおける格体系の研究
タマ ガワ ヒロ アキ 玉 川 博 章	ライトノベル文化研究 －ヤングアダルト文庫の周辺状況について－
チン ジャウン 陳 佳 雯	マンガにおけるオノマトペ －絵に関する情報を提供するオノマトペを中心に－
ツチ ヤ トシ ヒロ 土 谷 俊 弘	Taxonomy of the Genus <i>Ixias</i> Hübner (Lepidoptera, Pieridae)
ト イク 杜 昱	中国人学習者における日本語の文末イントネーション
フカ ガワ ヤス ト 深 川 泰 斗	アマチュアミュージシャンの戦術 －新しい音楽文化生産についての事例研究－
マエ ダ カ ナ 前 田 佳 奈	文脈指示の「こ」「そ」の選択要因 －いわゆる「強調」の「こ」の使用動機－
モー モー アウン モー モー アウン	ミャンマー語と日本語の格助詞の機能の対照研究 －日本語の「に」を中心に－
モニカ ダニエラ ハムチュック モニカ D. ハムチュック	日本語の擬態語・擬音語、ルーマニア語と対照研究
ヤマ ジ ナ オ コ 山 路 奈 保 子	日本語の談話における「ほめ」の機能 －小説中の談話における「ほめ」の観察から
ヨウ エン レイ 姚 艶 玲	ヲ格名詞句を伴う自動詞構文の成立条件
ヨコ ヤマ タカシ 横 山 尊	人性学としての優生学 －近代日本の人種・国民・階級と生命科学
キン エイ キ 金 英 姫	不純物をドーブした石英の合成とそのX-ray,ESR特性
トヨ ハラ アキラ 豊 原 彰	日本の宇宙開発に関する改革構想

(国際社会文化専攻)

氏 名				修 士 論 文 題 目
アイダ	フサコ			40年代後期の台湾演劇
間	ふさ子			ー言語の問題を手がかりとして
オオ	シマ	アキ	ヒデ	エンゲルベルト・ケンペル(1651-1716)資料に見られる「神道」研究について
大	島	明	秀	
クラ	タ	ノリ	コ	アメリカ公民権運動
藏	田	紀	子	ー分析視角の整理とその「アメリカ性」についての考察ー
コ	イケ	トモ	ヒデ	Dickensの英語における形容詞・副詞の比較変化
小	池	知	英	
コ	ダマ	ヨシ	ノリ	Studies on the Reaction Control of Photochromic Compounds Using Inclusion Effect of Mesoporous Materials
児	玉	洋	紀	メソポーラスマテリアル包接効果を利用したフォトクロミック化合物の反応制御
サカキ	バラ	タカ	ヒロ	地球環境政治における「南」の影響力に関する考察
榊	原	隆	宏	ー地球環境ファシリティをめぐる南北対立を事例としてー
シ	ミズ	チ	ジョウ	ヘルダー『魂の変転について』における魂の変転の問題
清	水	智	乗	ー18世紀ドイツ思想のなかでー
シン	ジョウ	ミチ	ヒコ	「植民地」朝鮮政策の可視化と揺動
新	城	道	彦	ー李太王及び李王の国葬にみる「植民地」朝鮮政策ー
シン	タク	ミ	キ	オキナワン・フェスティバルを通してみたオキナワンとしてのアイデンティティ
新	宅	美	樹	
スエ	ヨシ	リ	ナ	Wilhelm Busch(1832-1908)のコマ漫画にみられる記号表現
末	占	里	奈	
スナ	ガワ	エリカ		『バストン家書簡集(1425ー1520)』における非人称構文
砂	川	えりか		
ツジ	ショウ	コ		ケニア半乾燥地における造林樹木の通水コンダクタンスに関する研究
辻	祥	子		
ファン	チョン	ナン		入門期の韓国語学習における教育語彙の選定に関する基礎的研究
黄	暻	煥		ー日本語母語話者の若者を対象としてー
フジ	ワラ	ヒロ	キ	マルボシヒラタヤドリバエ（双翅目：ヤドリバエ科）の生態学的研究
藤	原	宏	樹	
ベルナルド	キマニ	キグワ		A comparative study of complete weeding and slash weeding methods on the physiological and root development
B . K .	キ	グ	ワ	of senna siamea (Lamarck)in the ASALs of Kenya
マ	ソウ	ケイ		江戸時代の文人煎茶
馬	叢	慧		ー売茶翁を中心にー
マス	ドメ	ユ	キ	カトマンズ盆地堆積物の粘土鉱物に記録されたモンスーン変動の研究
増	留	由起子		
ミゾ	グチ	ヨシ	ロウ	「中間人物を描け」論批判とその後の文学
溝	口	喜	郎	
リ	チ	ミン		戦前朝鮮における日本語新聞
李	智	旻		
ワタ	リ	ナオ	フミ	雲母類に対するRietveld解析の有効性
渡	り	尚	史	
ウチ	ダ	キ	ク	Harold Bloom の Shakespeare 批評
内	田	貴久美		ー <i>Shakespeare : The Invention of the Human</i> を中心にー
ウラ	タ	ユキ	エ	E.M.フォースターにおける女性ー対立・変容・融和の構図
浦	田	幸	枝	
イタ	クラ	ク	ミ	名詞・動詞に関するドイツ語化の規則性
板	倉	久美子		ーメーリングリストにおけるインターネット用語についてー
スズ	キ	ミ	エ	V.ウルフにおける時間と自我の問題
鈴	木	美恵子	コ	ー「意識の流れ」の小説を中心に

平成14年度 課程博士一覧

学位記 番 号	博士の専攻 分野の名称	氏 名	専 攻	博 士 論 文 名	
比文博甲 第 39 号	比較社会 文 化	ムナ カタ 宗 像	アキラ 朗	日本社会 文化専攻	発展途上国における持続可能な農村地域開発手法の確立に関する研究 ー参加型開発手法による地域住民の問題解決・資源管理開発能力の向上ー
比文博甲 第 40 号	理 学	ナオキド ヒロ 大城戸 博	フミ 文	国際社会 文化専攻	Revision of the ant genus <i>Myrmecina</i> from Asia (Hymenoptera ; Formicidae) アジア地域におけるカドフシアリ属の分類学的再検討 (膜翅目；アリ科)
比文博甲 第 41 号	比較社会 文 化	タツラ カン 俵 寛	ジ 司	日本社会 文化専攻	ベトナム古代考古学の研究 ー仏領インドシナ時代におけるドンソン文化／漢文化調査資料の復元的考察ー
比文博甲 第 42 号	比較社会 文 化	コシ ハラ ヒロ 吉 原 弘	ミチ 道	日本社会 文化専攻	中世文書の伝来過程の史料学的研究
比文博甲 第 43 号	比較社会 文 化	ウジ タ ジュンイ 辻 田 淳	チロウ 一郎	日本社会 文化専攻	古墳時代開始期における銅鏡の研究
比文博甲 第 44 号	理 学	スギ モト ミ 杉 本 美	カ 華	国際社会 文化専攻	Comparative morphology and ethology of the four grades in the family Psychidae (Insecta ; Lepidoptera) ミノガ科における4段階群の比較形態学及び比較行動学的研究 (昆虫綱；鱗翅目)
比文博甲 第 45 号	理 学	ヤ ゴ マサ 矢 後 勝	ヤ 也	国際社会 文化専攻	Larval Morphology and Phylogeny of the Family Lycaenidae (Lepidoptera : Papilionoidea) シジミチョウ科の幼虫の形態学および系統学 (鱗翅目：アゲハチョウ上科)
比文博甲 第 46 号	理 学	チウ ジュン デン 張 春 田 Zhang Chuntian		国際社会 文化専攻	Systematic Study of the tribe Dexiini of East Asia and the Oriental Region (Diptera : Tachinidae) 東アジアと東洋区域におけるアシナガヤドリバエ族の系統分類学的研究 (双翅目：ヤドリバエ科)
比文博甲 第 47 号	理 学	イチ キ リョウ 一 木 良	コ 子	国際社会 文化専攻	Reproductive strategy of <i>Bessa parallela</i> (Meigen) (Diptera : Tachinidae) ムラタヒゲナガハリバエ <i>Bessa parallela</i> (Meigen) (双翅目：ヤドリバエ科) の繁殖戦略
比文博甲 第 48 号	理 学	フローレス クラリザ ソカラン Flores, Clariza Bulacan		国際社会 文化専攻	Studies on the effects of compost application on the soil CO ₂ and O ₂ levels and on the tree growth 土壌のCO ₂ およびO ₂ 濃度と樹木の生育に及ぼす堆肥施用の影響に関する研究
比文博甲 第 49 号	比較社会 文 化	コシ カワ マサ 吉 川 勝	ヒロ 広	日本社会 文化専攻	情報化社会の自動車流通システム
比文博甲 第 50 号	比較社会 文 化	カタ ジマ チ 北 島 千	カ 佳	日本社会 文化専攻	Community's Coping Mechanisms for Crisis Management with Reference to Social Capability for Sustainable Development ーCase Study of the Community-based HIV/AIDS Orphan Care in Zimbabweー コミュニティの危機管理対応メカニズムに見る持続的発展のための社会的能力に関する研究 ージンバブエにおけるH I V／A I D S孤児のコミュニティ・ケアの事例ー

平成14年度 論文博士一覧

学位記 番 号	博士の専攻 分野の名称	氏 名	現 職	博 士 論 文 名
比文博乙 第 4 号	比較社会 文 化	コ トウ ヨシ ヒロ 後 藤 嘉 宏	図書館情 大 学 助 教 授	中井正一におけるメディウムとミッテルに関する一考察 ー中井の二つの媒介概念と、資料、官庁資料、本、図書館
比文博乙 第 5 号	比較社会 文 化	ア ベ ヤ ス キ 阿 部 泰 記	山口大学 教 授	包拯伝説の形成と展開